目次

◇研究　朝鮮製紙會社の事業
◇說苑　厚選リノ精神統一
◇隨筆　山中より後の一年有半
◇文苑　師走の窓語　俳句
◇雜報　庭球會記事　寄宿舍便り　會員動靜　其他

毎月廿五日發行　第三種郵便物認可　明治四十四年六月十四日

第百十號　大正七年十二月廿五日

研究

朝鮮製紙會社の事業

深山の埋木

第一　事業開始の急務

世界に於ける木材紙の需要は人文の進歩に伴ひ年次非常の增加をなしつゝあるにも拘はらず、其の大供給たる北米合衆國『パルプ』年額百八十餘萬噸）は從來の濫伐に依り著しく森林を荒廢せしため今は英領加奈太（年產額七十噸）輸入原木又輸入『パルプ』に依りて辛うじて其の供給を繼續するの衰運に傾きつゝあるのだ、次に歐州の大生產地たる瑞典（年額約六千萬噸）諾威（年產額約七千萬噸）に於ても從來の大伐採に依りて著しく森林を荒廢せしめたる上に今回の歐州戰爭に依り一層の過伐を行ひたるを以て戰後は其の產額を減ずるあるも之を增加する餘力なきは推定するに難くない其他獨逸（年產額六十萬噸年消費額百五十萬噸）歐、露主として芬蘭にして年產額約十二萬噸佛伊を始め歐州の各交戰國は今回の戰爭に依り森林の大荒廢を招致したるを以て戰後十年乃至二十年の間は之が復舊增殖に努め伐採利用の大緊縮を行ふべきは必然と認めらるを以て戰後世界を通じて木材紙の大缺乏を告ぐる事は明かである即ち歐州產の木材紙及『パルプ』は歐州自身の需要にも不足すべきが故に從前の如く日本、支那、印度、南洋諸島濠洲に向つて大輸出をなすの餘力なき事は言はずして明かである、大勢已に前述の如くなるが故に此際我邦の木材製紙業を極力勃興せしめ歐洲の弱点に乘じて永く東洋印度及南洋方面の大市場を占領しなくてはならん、然るに我邦內地の木材製紙業は何れも原料木材の不足に苦み現に富士山麓に設立せる富士製紙第一工場の如きは勿論熊本縣の九州製紙に至る迄遠く樺太若くは北海道材を搬入して僅かに命脈を續ぐる悲境にあり又北海道の王子製紙及富士製紙は開戰後著しく事業の擴張をなしたるも是れ亦原料の供給上前途不安の狀態に在り殘るは新進の樺太工場のみなるも是れとしても年產額は多くとも十萬噸を出でざる趣なるを以て是等諸工場の生產を擧げるも將來の大需要に對しては尙甚だ僅微なるを想はざるべからずである、然るに營林廠管內に於ては普通用材として利用し得るものを除き單に更新上の障碍物を掃除する意味に於て其廢物を利用する事とし尙每年二十有萬噸の莫大なる『パルプ』を生產し得るが故に一には林地の障碍物を掃除して更新上の完全を期すると共に一には暴殄しつゝある天然物を活用して大產業を開始するを急務なりと思考するのである。

第二　土社設立の目的

我が朝鮮製紙株式會社は定款第三條に記載してある如く『パルプ』及洋紙製造販賣を以

て目的とし附帶事業として森の買賣をも行はんとするものであつたが之を斷行する迄には各方面の調査と考慮とを要するものであるからなか〳〵容易に着手する事が出來なかつたが歐州戰勃發の影響として我製紙の需給關係に空前の恐慌を來たし自給自作の急務なる事は前述の如く朝野有識者の等しく自覺する處となつて今や考慮の時代は去り實行の時代に入つたのである、是等の刺戟即ち時勢の要求なるものが當會社設立の機運を催進せしめたのである、此の機運に驅られて昨年九月五日に定款を制定し十月廿五日に第一回の拂込みを了し（第一回拂込金額は株式の四分の一即ち拾貳圓五拾錢也）で舊臘創立總會を擧行し五名の監査役と十三名の取締役とを選任して茲に會社は成立した。

第三 事業の計畫及資本金の曲折

本社は最社王子製紙株式會社の一分工場として設立する豫定であつたが其の後考慮熟識の結果として獨立したる會社組織に變更したるのである。而して第一期計畫として固定資本を壹百五拾萬圓とし取敢へず『パルプ』二萬噸乃至二萬噸を生産し得るに至つたならば第二期計劃に移り資本金を倍加とする仝時に製紙をも併業し漸次三百五拾萬圓の資本に增加する心算であつた、併し時の局影響として機械其他材料暴騰し或るものは到底戰前の三倍若しくは三倍を拂ふとも需められないと云ふ有樣を變つて來たから此の計劃では怎ら採算も出來ない、それ故此決して樂觀することが出來ない計劃を根底から樹て直して資本金を五百萬圓とし之れを一般公衆から三割即ち百五十萬圓を募集し殘部の七割に相當する株の全部即ち三百五十萬圓を王子製紙會社が全責任を帶びて引受けて呉れることに協定したのであるそして一般公衆から募集する三十萬株の分配方は其の範圍を內地居住者にして朝鮮滿州に緣故を有するもの及び在滿鮮有力者を定めてそれぞれ既に容易に解決告げたのである。

第四 王子製紙會社の援助

戰前の計劃では百五十萬圓を投じたならば機械其他一切の工場諸設備は完了する筈であつたそれが時局のため諸物價騰貴の今日では三百萬圓あつても完全の設備が出來ぬが怎うか判らない恁麼時機に設立を敢行するのは寔に冒險的であるから工場の建設を戰後迄延期しやうではないかとの意見が重役中の多〳〵のものゝ心理を心配した結果として唱導された時機もあつたが今後幾年經つたら終焉の期を見るか殆んど逆睹し難い歐州戰亂を待つて折角計劃した國家的要求とも謂ふ可き此事業を延期する事は會社設立の許可を與へて呉れた朝鮮總督に對し面目なき所であるとし又該事業に對つて尠からぬ期待を繋いで居らるゝ需要者に對しては失望を與へる事となり更に他の一面に於ては若し會社の創立を平和克復の後に待つたならば可惜好機を逸し時代を後らすの感がある戰後の用意として餘りに緩漫なりとの譏りは免れないと云ふ惧れがある故に此際萬難を排して初志を貫徹すべく決心する事となつたのである併し第一回の拂込み金額を百三十五萬圓のみでは事業に着手するに資金が餘りに貧弱であると云つて此際第二回第三回と連發的に拂込を强請するのは株主に對して氣の毒であるから王子製紙會社に諮つて二百萬圓の低利資金の融通を仰ぐことにした此借入金は我會社が相當の成績を擧げ得る迄無利子で融通して呉れるのであるから會社としては這麼好都合の事はない王子製紙會社が斯く迄力瘤を入れて我社を祐けて呉れる精神は盡し前述の如く斯業の催進發達を國家的時勢の喫緊事と信ずるからである（未完）

說苑

屑撰りの精神統一

川生

去十一月九日、陸軍中將堀內文次郎閣下擊劍に關して精神統一の率を力說された。至極有益なる話と頗る感服した、諸君も御同感であらうと思ふ。

精神統一に就ては、吾輩等の食堂に於て

も種々の話が交換された平凡な話もあるが一寸面白い話もある。

面白い話といふのは斯樣である、屑屋が買つて歩いた屑は、それ〳〵選り分けられて、其の向き〳〵に轉賣される、其れが屑屋の商賣であるが、其の屑を選り分ける人物といふのが中々尋常ではいかぬさうである。是れは大なる精神集中言ひ換ふれば精神統一が必要であるからである。

何故かといふと、一屑は御承知の通り種々雜多である赤い布片もあれば青い紙もある草紙を揉んだのもあれば手紙を引捌いたのもある、其間には無論好奇心をそそるものもあるであらう、併し此の好奇心を出す樣では最早屑選別人としての資格を失ふのである、斯くては忽ち選別を誤り紙クヅと布片とを一緒にする樣になる。だが普通の人では到底此の好奇心を出さずには居られぬ、一寸皺を延ばして讀んで見る、モウ駄目である、茲に只獨り文盲の人間丈けは終日精神統一が出來るとのことである、無學文盲も斯うなると大したものである、十呂盤を以て加へ算などをやる時も終始十呂盤玉に精神を込むることは非常に困難である必ず何か他の事を考へるものである自分は其積りでなくとも考へる樣になる又寢て眠れぬ時などに數を數ふれば眠れるといふからやつて見ると矢張何時とはなしに數のことは忘れて他の事に氣が移る、口で許り數へて居て、頭ではほ他のことを考へて居ることもある、要するに精神の集中即ち統一は頗る困難たるを免れない。

稅務署等は、隨分十呂盤の必要な役所の樣に聞いて居る、事實十呂盤の達者な人も多い大勢で十呂盤をやつて居るが他人の讀み聲が耳に入る樣では駄目だといふことである併し練習を重ぬれば人の聲など耳に入らぬ樣になるさうだ。

寄宿舍などでは人の聲が自分の勉强の妨害になることが往々ある、是が寄宿舍を出る口實となる事などもある樣だ、斯樣な事では到底いけない、社會に出てはコンナ勝手は言つて居れぬ。

是から物質文明の刺戟が强い丈け、精神の修養が一層必要である。其の修養に就てはクヅ選りの精神統一を大に味ふ必要があると思ふ。

隨筆

山中より

藏尾彷雪

山又山の山中に暫時の沈默を續くる內に卒業後の一ケ年は過ぎ早や貳回目の秋とはなりぬ。

『文はやりたし書く手は持たず』の例へに洩れず御便り致したき事は落ち來る秋の雨よりも多けれど性來に拙筆を如何にせん

▽事務室の一隅

S『今朝は隨分寒いじやないか』K『ぼんとに雪でも降りさうだね』S『小使に火を持つて來ささうか？』K『まー止し給へ正し給へ西伯利亞に出兵して居る人を思へば內地で安閑として火に暖る氣にもなれないよウイルソンじやないが出征兵は僕等の選手だその選手は今頃異國で寒い目を見て居る。高い木炭をつかふ金で慰問袋の一つも送り給へその方がだいぶん氣が利いて居る』S『人が何か話をすればすぐ西伯利亞〳〵と云ふが君の弟でも出征して居るのか？相變らず君の樣にシヤベリヤだらうね』K『こんな馬鹿野郎人をからかうにもいゝ加減にしろ、口は何の爲めにあるのか知つて居るか……S『オヤ〳〵〳〵どうやら低氣壓が來たようだ雨の降つて來ぬ內に退却〳〵』K『おいS君、最早や十二時だ晝食にしようじやないか』S『それでは晝食にしよう』K『オヤ君の辨當箱はバカに長いね』

Sわかつて居るよわき目をせずに食ひ給へ

K『何だそれは竹の筒じやないかまー見せ給へ』S『うるさい人だね今頃流行する大正辨當だよ』K『然した菜が無いじやないか』S『いらぬ心配をしなくてもいゝよこの粥の中に鹽が入つて居るから』K『ハハ……何處迄も大正式だね就てはどれだけの利益がある』S『曰くさ米の儉約木炭の菜辨當箱の經濟はさて置き粥をすゝる時チユウ〳〵音がするから獨身生活は淋しがつて居る人に

は無上の良藥だよ』『米と木炭の儉約が出來るとは愈々結構だ米の一升五十五錢にも驚くが木炭の騰貴できたらすばらしいものだ』S『其の素晴しいものの儉約が出來るからこそ中將の二級上の大正（大將）式だまわかつたか』K君『近時世間では米價の騰貴に苦るしむと共に炭價調節だのなんだと言つて騒いで居る實際無理からぬ話である木炭一俵總目方六貫目の價格が一圓七十錢而も風袋を去れば正實は僅か四貫目と九百匁位昨年は五十錢だと聞いては實際あきれざるを得ない諸物價騰貴より以上に何故木炭が斯く騰貴したか原因は次の樣なことが主である

1、石炭暴騰の爲め木炭を工業用に使用すること

2、現今到る處雑木を伐採し杉扁柏を造林せしため製炭材料少きこと

3、深山にて製造せし運賃高價なること

4、需要期に向ひたること

5、木炭商人の不正行爲のため

◎製造元にて一俵に何程の費額を要するか

1、一俵の木炭原料十錢

2、一俵の炭燒賃平均四十錢

3、炭俵四錢

4、繩代二錢

5、市場迄の運賃三十錢（里程十五里内十三里は馬車二里は木馬運搬）

6、諸雑費三十五錢（事務員給料、竈築造補給金居屋固屋補給金修羅道補給金）

合計一圓十一錢

製造元より商人に渡す一俵の價格一圓三十錢故に製造元は一俵に付拾九錢の純利

商人は一俵に付四十錢の純利

製炭夫（炭燒人）は如何

夫婦及子供の三人暮しにて（土佐竈式白燒）一竈六十俵とし　月貳竈を出す

一俵燒賃四十錢

月四十八圓

◎鳥も通はぬ八重山中に居て月收四十八圓とは驚くじやないか村長でさへ貳拾圓だのに月收がこんなに多いものだから杢も百姓も猫も杓子も皆炭燒に早變りしてしまふやうなありさまだ指をくはへて見て居るのが官吏さんばかりの色が黑いとて心配するな炭燒樣にも妻はある

（完）

後の一年有半

於白頭山麓　坂本光太郎

○シンノコを抜かる？

或る日外科の醫長が回診に來られた時腹を探りしな『如何ですオナラが出ますか？』と問はれたので『ハイ出ますが其の時非常に肛門が痛みます』と答へると『其の間を通つて出ますか？』とまた問はれたが、其の間を通つてとは何の事か少しも解らんが『やはり』『ハイ出ますと』答へると『宜しう御座いますと出て行かれた。先の醫長の一言が何の事か了解に苦んだが例の如く明朝もガーゼの詰替へに行くと看護婦が二人で、自分の脚を胸の上にて交叉して捕へ『坂本さん今日は抜いてあげます少し苦しいかもしれませんが我慢して下さい動くと春中へ水が流れて行きますから』といふので何を抜くことか知らん糞便の出ない樣に一寸肛門に脱脂綿でも詰めてあるのを抜くのだらうそれにしてはあまりに大袈裟な事を言ふものだ……

醫師が肛門に手を當てたかと思ふと想像とは全く違ひ消毒のために腸の中へ一ぱいに膿の邊まで詰込んであつたガーゼを引き出すのであつた、此の時の苦しかつた事は俗にシンノコを抜かれると謂ふがこんな苦しいものかと想つた、道理でしばし〳〵肛門の痛んだのが解ると同時に昨日其の間を通つての疑問も了解が出來た、其の次の朝からはおもゆが粥と代り牛乳は少し飲用する事を許されたので少しは腹ごたへがある。

一二日間は事無く過したが三日目からは便が催して來た、誠に穢い話で失禮ではあるが仕方がないので、或晩寢臺の眞白いベットの上に新聞紙を伸べ仰向きになつたまゝ蒲團を被つて便器を尻に敷き……

處が大失態を演じガーゼは飛んで傷口を汚し看護婦を呼びガーゼの詰替へをなす附添人には夜具を取り替へさせ爲めに寢臺より

下りて立つて居る中に眩暈がして卒倒したのであつた、十一日目には青い三角板も白色板に代り今朝からはガーゼの詰替へにもゴム輪の危介にならずばさんの手を便りに歩いて行く事にしたが、何となく一人で歩くと膝節が不意に折れて倒れる事もあり又頭から先に行く樣な氣がして危險でならなかつたが、二週間の後には餘程元氣が恢復して來て退屈になると院内を一調するが夕方には醫師看護婦及運動を許されて居る患者のローンテニスが初るので廊下のベンチによつてそれを眺めるのが唯一の慰めであつたそれにしても僕の頭から苦痛の去らぬのは毎日粥食にもつて來て便を柔かにするため下劑の混じてある水藥を服んで居るので日々二三回は便所通ひするが丁度婦人が少便する時のやうに半腰になるのであるが何分傷口にしみるので痛くて困る後はリゾール液の混布で以て消毒するのであるが目下の處これが一大難事である次ぎには毎日〳〵ガーゼの詰替に醫師と看護婦に尻の穴を拜がまれる否覘かれるのが一大辛事であるこれには流石の大男も聲を擧げて泣き度くなる。

北韓の天地は少しも僕に幸福を與へて呉れぬのみかます〳〵此身をして逆境へ逆境へと導いて遂ひにはこんな苦しい渦卷く怒濤の中へ投じてしまつた、嗚呼無情なる哉天不公遇なる哉此の身噫……。

○雁が音

此の時分に友人或は知己から數多の見舞狀を寄せられた、今次に一友人から送られた御手紙の全文を掲げて見よう

拜啓

〳〵度々君からの便りを貰ひつゝ而も返信も怠つてゐたことは如何にも申し譯のないことで又極めて無情漢の樣ではあるが實は吾輩は長野へ行つて十日あまりも居て來た樣な次第で（追て詳細は通知する考でゐる）極めて忙しい昨今であつたからであるから只管に御許しを願つて置く長野から歸つて數ある書信の中に君の病院からのエハガキを見て大いに驚いた、近來の御樣子は如何？其の何病であるかは知るに由もないが手術を受けられたと言へば余程のことであらうと思はれるが願くは心を安泰にして恢復の期の一日も早からんことを祈つて居る。

坂本君……、

君と別れてからはもう何年になる事やら余はたしかに覺えてゐる。福島停車場の木の香の高い夕暮の事であつたと、君はよく僕を送つて呉れた、そして僕が君の外出を證明すべく余の名刺へ認印を捺して發車の際君に渡したことなど眼の前に今猶髣髴として浮ぶのである。

飜つて思へば我輩もS學校に生活した頃は若かつた……我輩と交通した人もやはり若かつた而も誰が今日の牒態を豫期して居たものであらうぞ。T君M君等の靈の爲めに一掬の涙を捧げねばならぬと共に、薄倖にして去られた溫厚なるM校長をいたく氣の毒に思ふのである。是非一度木曾へ遊んでM校長ともゆつくり話して見たいと思つてゐたのに今は幽明境を異にしてしまつたコスモスの咲く木曾の秋が忘られぬものの一である。赤い柿の熟する頃如何に木曾川の水の青く白く美はしいことであらう。世を去られた諸子の靈の永に安からことを只管に禱つて置く。

坂本君……。

君も御承知の通り小學校教師の境遇は如何にもみじめなものであると思ひ給へ。而して余は不斷の努力を以つて、向上發展を期して居るのであるが未だに現實にこれを現はし得ないのである。當年の意氣は今猶盛んであるけれども如何にも恥かしい次第である君はそれにつげても決して自分の境遇を悲觀してはならない。

坂本君……。

僕の居るところは木曾の駒ヶ岳の裏にあつて居る山手のある盃室を借りて余は自炊生活をしてゐる。余はこれを『山莊の生活』といふ山莊にあつて余は讀書研鑽今數年と劃して一大發展をせねばならぬと思つてゐる。

再び君と見ゆるの日を如何に樂しみ待つこ

調法な人間がゐたが永い病院生活のことてそれは不自由な躰で退屈してゐるところへ僕が來たので好敵御ざんなれといはぬばかりに喜びこれより毎日朝鮮と滿州の話戰が開始され或は世間話に花が咲き何時も互に負けず劣らず戯談を言つて看護婦等を笑はすので他室の苦しい病人の看護をして苦しい顔ばかり見てゐる附添人等は入り替り立ち替り遊びに來る樣になつた。

外科の室で樂器使用は差支ないので或時慰めに看護婦にねだつて蓄音機を貸して貰つた、十八、九世紀の細長い喇叭仕掛けの舊式でレーコドほ殆んど完全のものなし或は破れ或は磨滅してゐて頓と蓄音機としての價値がない、捨てゝも惜しくない樣なものだ、蓄音機は貸せてくれたが針がないといつて貸してくれぬのでこれでは畵餅に等しく何等蓄音機の用をなさない何んとかして鳴らぬものかと函を覆して探すと一度使用した針が十五、六本何處からか出て來たからこれを何回となく用ひて三、四日に及んだ其の時Tといふ看護婦が廻つて來て、坂本さん、針がありましたかと尋ねたので否、貸して呉れぬからありません僕は今釘を拾つて來て鳴らしてゐるのです、とやるとTは一寸窺いて見て『あらこんなことをすれば蓄音機が壊はれてしまいますよ、もう止めなさい』と言ひ放つて詰所へ立ち返つたかと思ふと、一人の見習看護婦を連れて破れても惜しくない樣なものをどん〳〵函に納めて持ち去つた又或る晩第二病棟の看護婦取締をしてゐるTが盛花をして來て自分の枕元に飾つて呉れたが朝起きて見ると心が委れてゐるのでこんな縁起の惡いものはと引き抜き折つて紙屑籠の中へ投げこんでゐくと丁度T看護婦が巡視の際これを見つけてデカイものに御立腹遊ばし『あら坂本さんですか、こんなことをしたのは折角私が昨夜生けて皆んながよく出來ましたと賞めて呉れたのに、こんなことをしてしまつて……此の心の木をたゝへてあつたのにこれを引き拔いてしまつては何の意味もなさない……坊ちやんがこんな事をしてしまつた』と第二病棟中轟き亘る樣な聲をして詰所へ持ち歸つた。

その後に『Tさん、此頃は誠に濟みませんことをした何卒御立腹なさらない樣にた許しを願ひます』と謝罪すると『否へ何わたし別に怒りやしませんよ只ネ皆んながマアよく出來たと賞めて呉れたのでTさんやあなたの慰めに置いて來たのをあなたが心を拔いてた棄になつたので殘念だとおもつたばかりですよ』といつては居たがあの時の權幕は當るべからずであつた。（末完）

雜

脈はかる看護婦の時計の小刻を
吾はうつに聞き居たりけり
病院の窓より青き顔を出す

淋しき女今日も見にけり
うら若き看護婦の手に病院の窓より
夏を送りぬるかな
旅役者病みてすてられ旅になく
ましてや秋は悲しきものを
見習の看護婦一人さびしくも
窓にもたれて虫の音を聞く
病室の壁にもたれてしみ〳〵と
鏡にうつる顔見守れる

文苑

師走の窓語

星波樵人

印象派の繪に見る樣な直線的曲線が不規則に入り、合つて高く聳ゑた山々が幾個か壓し重なり其間を細い峽道が蜿蜒として折々材木を積んだ荷馬車が此の凍結した峽道を震ゑ乍ら通る日に三回か四回質朴な峽の靜寂を破る彼のレールを辷る汽車の轟音と彼の反響する汽笛とは此峽の文明なる事を證明する樣に聞ゑる。

さうして彼が吐く煙は褐色に凍ゑて居る岡から岡へ谷から谷へと、果ては雪の露西亞を想像せしめる樣な灰色の雲と一緒になつて終ふ。雪と霜と氷と膚をさす樣な風とが凡ての人々に峽の冬を覺らせた。

誰も皆栗鼠の樣に圓くなつて火鉢やストーヴに對して感謝する樣になつて。來た冬である、冬である。確かに冬であるが然し師走の氣分……其れの方が或ひは濃厚で

とだらう。

きその夜の小雨にぬれてふす萩の
露ふきはらう秋の朝風

坂本君……。

君は如何にも心情の美はしい人である、世の中には時日を經るに從つて全く相背いてしまう人がいくらもあるいくら堅い締結をしてもいつしか時日と共に相忘れるのが多い、此の人生にあつて友程貴いものはない願はくは永却に變らないで欲しい。

病床にあられる君は極めて寂びしいことであらう、內地のことが種々思はれるであらう如何にもお察しする。

而して內地と雖も決して樂しい所ではない矢張りそこには生活の苦闘があるのである

○時代は新らしい發展を望んで止まない各方面に於ける進歩變遷は實に驚くべきものがあるのです。

されば朝鮮の新天地に於ける君の活躍は決して將來無意味のものでない益々御健闘を望みたいそれには第一體が健全であらねばならぬ。

坂本君……。

此處には驟雨が幾度が來て今しきりに蟬が鳴いて居ます、もう此邊に秋風の立つのも間近いことだらう。

私は今山莊の獨り住居に於て、君の俤を偲びつゝ此の書面を認めて居るのである。私は今猶家をなさないのです此の書面の着く頃は君の御病氣が全く快癒されて居ることを神かけて禱つて居る。さらば……

八月十九日夜　M M 生

坂本君坐右へ

『ひさぐに君がたよりをよみきつゝ
心いつしかはかなかりけり

又他のM氏からのエハガキには

『此の熱いのに病氣なんて氣がきかん、君は酒を呑まんからだめだ、酒をうんと呑むと癒るよ、何の病氣だい下らぬ病氣をするよりは肺病はハイカラでいゝね……。

○○へ避暑に來れ、景氣のよい所があるよ

僕は近頃悟道に入つて居る、これで失敬する自愛を專一にあれ……。

○特別三等室

隣室には非常に心臟の惡い脚者患者が居るのでをり〳〵苦しい唸り聲が聞ゑるのだが此方はだん〳〵元氣が恢復して來るに伴れて話も元氣づき附添人を相手に高話をして、笑ひ或は回診時間も知らず尺八を吹いてゐて看護婦に注意を受けた事も再三であつた、其の中に他より附添人を是非貸して呉れと頼まれ遂に附添人は奪ばれ眞に孤獨の生活を送らねばならぬことになつた。それから後と云ふものはます〳〵無聊を感じ殊に夜は節たもしろい支那芝居の笛の音が聞ゑ生が性質をしていつまでも檻中の虎然として居ることは出來ず。しば〳〵無斷外出をなし安東市街の夜店を素見して廻り歩く處を適々裁縫及生花の指南所通ひの外出看護婦（紫色の袴を穿きて外出を爲す）に見付けられ其の中には受持の看護婦も居て

『坂本さん何處へいらつしやるの無斷外出はいけませんまた惡くなつて先生に叱られても知りませんよ……』

などと叱られたのであつた、あまり寂しい〳〵といふので或日看護婦が『坂本さん御退屈でせう、そんなに淋しかつたら三等室へいらつしやい、あそこには色々な人が大勢ゐて賑かでたもしろいですよ』と親切に勧めるのでいはれる儘に三等室へ移ることに決めた。

此の三等室は普通のそれとは異り、これは第二病棟の看護婦の食堂であつたのか患者が多數のため臨時病室に充てゝあるので他の三等室には十五、六人の患者が寢臺を並べて居るのであるが此處には支那人一名、朝鮮人一名と外に鳳凰城より來たTといふ三十七八歳になる痲毒のために手足の環節が腫れて非常に痛み少しも歩行の出來ない人が一名と都合四名の者が各隅に一名宛陣取つて、いはゞ特別三等室である。

Tは支那語も少し話せる樣であり又附添として來てゐるのは支那人ではあるが幼い時永らく長崎の邊にて育つたとか言つて日本語は十分に話す事も出來又朝鮮語及露西亞語も少々操つれる即ち四國語に通じてゐる

はあるまいか。出來る丈自身の顏をマントや襟卷に埋めてチョク〳〵小足に歩いてゐる往來の人達のスエーるには爭はれない師走の氣分が漂うて居る。

『嗚呼今年も是で終るのか』と余白の少ない日記を繰つて見る時に或二種の感に打たれずには居られない。自分の書いた日記それは餘りに賴りのない無意義なものであつた否或は自分の過去一年に於ける生活行動がそれを飾る程の尊さと勇氣とを持たなかつたのかも知れない。吾等が育て上る樹木でさへ一年を經過すれば立派な年輪を增加する事を忘れない——尤も濶葉樹の多くは別だが——我等は此一ケ年春夏秋冬、日で云つたならば三百六十餘日何をなすべく生活して來たのであらう？日記には勿論書かれて居ないプートを調べても頓と解らない。只吾を支配したタイムの速さには驚かざるを得ないと云ふ許りであつた。

吾を若しくは吾等を支配するタイムは或人に取つては吾等が支配するタイムである。基督の口調を眞似て『弱きものよ汝の名は心なりと』云ふべきあつた。

常にタイムに支配され、丁度犬に見付つた痔せ狐の樣に、タイムに追跡され、タイムに壓迫され窮々とした此心で如何して立派な有意義な日記即ち生活史が得られようか今更ながら省みて憮然たるものがある。

『時を支配する』其れは我等が犬や馬や牛を使役する樣に、時を上手に使役する。甘く利用するに外ならない。

自分で云ふ個人の歷史は餘りの貧弱に愛想の盡きる樣な物であつたが、社會上軍事上幾多の人々が築き上た雜多の行動は忘れ難い大きな足跡を永久に殘すであらう。過去一年は暴風後、部落を見る樣に色々の事件に遭遇し得た壹ケ月一億八千壹百五十萬磅の金を投擲つて、血と肉と彈丸とを點綴し古今未曾有の悲慘な光景を畫いて得意になつて居たカイゼルも今年は到頭彼の頭へ『前』の一字加へらるゝ運命に墜つた。

應報因果とは云へ、前カイゼルの末路又ナポレオンの如く哀れな色彩を以てせらるゝを思へば多少同情する点がないでもあるまい。

物價暴騰、米騷動、醜賄事件、出兵、內閣交迭流行性感冒、講和使節派遣など色々な事件を織りなして我等は一年を殆んど過去に葬つた『經濟上に思想上に色々の變動を來たした然もそれが今迄にない程の變調であつたに違ひない』と多くの人々の話である。

過去一年。元より鈍クラ頭の自分には其程度や樣子や然否などが解らうはずかない。只自分は今後は努めてタイムを支配せねばならない事を悟つた。

萬象雪に凍て、靜寂から騷音へ、闇から明へ、曉の女神オーロラの車が軋る時、平和な谷々の家から餅搗きの煙が立昇るのも後數日の中であらう。

正月になると『た愛出度い』云ふ、『樂しい』と云ふ、然し何故樂しいのかた愛出度いのか解らない只何となく嬉しく樂しいのである。

誰でも此の樂しさは密よりも甘い濃厚な樂しさに飽まで浸潤して、結局タイムに使役され易いことになる換言すれば時は此歡樂を吾等に提供して吾等を欺き吾等を支配せんとするのである。

嘗て長い間かかつて槇牛全集を讀んだ事があつた。自分の樣な者が讀んだ所て何の意味も何の印象をも殘さうはずはない。寧ろ全集の字を見たと云ふ方が最も適實かも知れない。彼高山槇牛が『現代に超越せざるべからず』と云つたのは今更取出す程にもないが暖國の樹木を見た雪國の兒童の樣に低級な思想の自分には只眼をパチクリさするばかりである自分は現代に超越すると云ふ樣なそんな偉大な非凡な事柄よりは先づ『其場に超越せざるべからず』と思ふ。其場の超越是がタイムを支配せんとする唯一の好手段ではあるまいか。

霜害に逢つてからの霜覆は既に人間がタイムに迫擊されたのである。其場の超越。其れは如何なる寶石よりも尊く崇く感じられる。

由來自分は非凡とか偉大と云ふ言葉は氣に喰はない。頭腦の低級を示して餘りあるものかも知れないが、自分は所謂『道は遠きに非ず』で手近い事を好む。

俗に云ふ非凡とか偉大とか云ふことは、凡な事、平凡な事、に外ならない。平凡は所謂當り前である、彼の人は非凡であると云ふが其人としての當り前の道を通つたばかりである。即ち平凡である。

兎に角吾等は時を制するべく努力せなければならないのであるまいか。

俳句

大坪　蘇仙

渡る雁二三羽見ゆる哀かな
門に倚る母なつかしき月夜かな
夜は淋し長安城の砧かな
月に吹く笛に涙のある夜かな
猿鳴いて配所の月の凄さかな
明方の夢の寒さやつぐみ網
曉や富士川寒き渡り鳥
樺太へ出向を命せられて　杉本生
寒い樺太何こわからう
あつい寒いは氣の迷ひ
住めば都かあの寒國も
覺悟きはめて船出する

雜報

庭球會記事

時恰も十一月二日なり。

千巒萬嶽の櫚樹は、票烈の季に入りて二月の花より紅となり、古鏡を沈むる木曾川の水、亦紅を流し、秋深うして菊花日に薫り梧桐風に鳴る。

此の日、我が校友會は秋季庭球大會を、杭の原々頭なる我が校庭に催じぬ。

猛士が『頃日鍛へし甲斐は、晴の此場に赫躍としてあらはれ、『秘は秘』『能は能』『神は神』と、妙技は深奧に徹して鬼神を突かしめ、流石の熊谷にも劣らぬ有樣と見て、技は益々『工に入り巧に入り』將に佳境に入らんとする刹那、恨むべし場面は霧々たる秋雨の幕に包まれぬ。

四日（月曜日）

暢達の空は一點の雲翳だに殘さず、豊かなる秋氣は天地を蔽ひて萬野肅殺蕭條たり。我か校庭復闇々の聲起り、前日に續く競技の幕は切つて落された

選手か妙技は昨に優りて愈々發揮せられ、其の秘術を盡し鎬を削る有樣は、夕陽に映ゆる四山の楓樹か紅の色を競ふに似て、傍觀者の歡聲湧くか如く、興趣津々として盡きず然れども釣瓶落しの短き日足漠々として黃昏に向ひ、プログラムの數亦盡きて、解散の振鈴場に響く、かくて豫定の如く其の終を告げぬ。

稍ありて悲風は原頭を颯して、荒漠寂寥の夜は將に襲はんとす。

尙又茲に特筆大書すべきは、中村先生沼田書記の見事なる勝利にして、日頃の鍛錬さこそと見ねたり

勝敗の成績別項の如し

○……勝チタル組　×……負ケタル組

第一回戰

×藤田……○長谷川（要）
○前田……×中田
○渡邊……×本南
○西牧……×長谷川（都）
○本南……×片桐
○小幡……×高野
○田中……×小林（愛）
○震上……×小林（元）
×吉田（正）……○立道
○橋爪……×深澤
○矢島……×廣井
○富士川……×小池（常）
×中村先生……○塚越先生
○沼田書記……×武居先生
×校長先生……○小貫先生
×宮川先生……○武居先生
○井原……×青木（忠）
○和田……×箕部
○宮澤……×水野
○野本……×山崎
×星……○早川（嘉）
×原英……○八木
○中村……×奥村
○丸山……×古畑
○遠山……×高橋
○向井……×千田

○○北村　×長田
○○福川　×立道
米久保　×篠原
×山本　○宮下
○○家高　×岡庭　○佐藤
×坂巻

第一回戰

渡邊　×前田
○○西牧　×藤田
田中　×本南
○○霞上　×小幡
矢島　×佐藤先生
○○富士川　×島内先生
×宮澤　○和田
○○野本　×井原
×吉田（正）　○八木
○○橋爪　×早川
○○喜多村　×小貫先生
福川　×武居先生
○○丸山　×校長先生
中村先生　×塚越先生
×中村先生　○遠山
○○沼田先生　×向井
×篠原　○岡庭
○○宮下　×家高

第三回戰

○渡邊　×田中
○○西牧　×霞上
野本　○矢島
×富士川
×宮下
×篠原
○中村先生
×沼田書記
○○丸山　×岡庭
○○家高　×喜多村
○×福川　×吉田（正）

優待戰

渡邊　○野本
×西牧　○宮澤
○○中村　×喜多村
丸山　×福川

最優待戰

○○丸山　×宮澤
中村　×野本

二組ぬき

○中村先生　○丸山
佐藤　×山
坂巻　×千田

三組ぬき

高橋　×田

五組ぬき

沼田書記　中村先生

寄宿舍便り

立道生

烏兎匆々關守なしとはよくも申し候もの哉翠滴る木陰に涼しき風を戀ひ、泉の音に苦熱を遣りし夏の日も、時を云ふ力に追ひまくられ、滿山錦を飾り金風颯々として立田姫の車駕を迎へしも夢となり、窓下には木葉堆く滿目荒涼たる初冬の期に入り申し候。前期試驗終了後は毎日五月雨の樣に鬱々として霖雨降り續き候ひし爲、秋期實習も終日活動するは稀にして、駒ヶ岳颪の驟雨に頭をかゝへて寮舍へ飛び込む事も度々有之候ひき。實習終了後もヤレ運動會ヤレ觀楓會　弓術庭球大會ヤレ誰の講演會といふ樣に、とかく事多くして、燈火親しむべき好シーズンも、半ヤンヤの內に終り申し候

齡耳順を越えたる人の言により候へば『寒氣の强かりし年は必ず脚氣患者多し』とこの言の眞僞は、淺才なる小生か智炬を燃した程にては、理解することを不可能に候へ共今年は奇妙に其の言葉か適中致し候、五月下旬頃より追々生じ、夏期實習をなす能はずして歸省する者多く、中には停車場迄歩行し難くして、人力車を迎へて紳士體には歸途に就く等の奇劇を演じ候、かゝる有樣なりければ、室によつては三名位の所も有り、一時は非常に寂しく候ひしが、其後氣候の

良くなるに伴ひだん〳〵全快致し、今は一名の罹病者もこれなく、至極健康にて和氣靄々の裡に日を送り居り候

秋期に至りて病勢を逞うするかの膓窒扶斯當福島町へも浸入し來りて二三名の患者を出し、かの五號苗圃の側なる隔離病舍も久し振りに賑はひ候、弊舍へも襲來せざるかと杞憂致し候へ共、病菌も健兒には適し難くやありけん事無く濟み候、然るに今度の世界的大流行性感冒には、さすがの杭か原健兒も力及ばず終に閉舍するの已むなきに至り候、時しも十一月夕刻より一名出來二名かゝり、六日の午後には十名も侵され候故、校醫を招聘して診察を受け候處、勢猖獗にして益々傳染する憂ありとの故を以つて、同日午後七時學校の掲示場に『明日より七日間流行性感冒の爲休校す』と掲示せられ候故舍監先生の御言葉に從ひ、健康者は歸省又は外泊する事となし、罹病者は平癒する迄滯舍するに決したる次第に候、七日間の後同月十四日復校致し候も全舍生の揃ひたるは二十日頃にて候ひき。

十二月三日　日本晴の快晴にて寒風身にしむの日午前八時半より日義村宮越の川原にて、發火演習行はれ、ひねもす敎と劇戰して腹の底の底迄へらして歸りたる舍生、夕飯大不足となり米櫃をたゝく者、炊事員を惡く云ふ等一時は非常の騷ぎなりしか二回の追加にてやう〳〵おさまり候

今や寮舍あたりの紅葉は一葉も殘らず散り果て、かの炎熱燒くか如き夏の日、草取りに汗を絞りたる苗圃も、毎朝霜白く降りかかり、落葉松苗の梢か層一層褐色に鮮かに目立つ樣に相成候。

寒さが增せば增す程火鉢か戀しく、室員擧つて暖をとりつゝ冬休みの來るを樂しみに雜談に耽り又月に一二回學生羊羹（ヤキボテー）等購ひ來り、健啖して互に御國自慢に花を咲かす等の愉快さ、寄宿舍にあらでは思はれ候、西御嶽、駒ヶ嶽は最早二旬も前より嶽雪皚々として、吹き下す風も骨に徹する樣に相覺え申し候へば、白雪粉々として降り來りて、寮舍の雪や永に閉さるゝも程遠からずと存じ候

（十二月十日記す）

會員動靜

山下不二三君　三本木小林區署より岩手縣岩手郡沼宮內小林區署へ轉せらる

小澤安親君　一年志願兵として東京近衛步兵第三聯隊に入隊せらる

早川一雄君　兵庫縣廳林業係に轉勤せらる

山崎兵平君　今回森林主事に任命せられ引續き仙壹小林區署に勤務せらる

小林左門君　一年志願兵として松本步兵五十聯隊へ入隊せらる

松島長二君　今回滋賀縣大津步兵第九聯隊第四中隊へ一年志願兵として入隊せらる

小林英一郎君　高田市野砲兵第十九聯隊第三中隊へ入隊せらる

星加正雄君　廣島縣福山步兵第四十一聯隊第一中隊へ一年志願兵として入隊せらる

原彌藏君　埼玉縣兒玉郡若泉村大字渡瀨に住居せらる

杉本貢君　樺太廳へ轉せらる

三尾貫三君　今回壹年志願兵として豐橋步兵第六十八聯隊第八中隊へ入隊せらる

宮崎二朗君　本月二日より病氣中の處九日午後六時永眠せらる

森次潔君　鳥取縣八頭郡那岐村に住居せらる

矢崎清海君　豐橋步兵第六十聯隊第二中隊第二班に壹年志願兵として入隊せらる

丸山嘉市郎君　今回森林主事に任命せられ長野小林區戶隱保護詰を命せらる

謝恩金領收報告

內藤先生	原　潔君
金五拾錢	
金壹圓	吉村金次郎君
金壹圓	橫井　正守君
北村先生	
金壹圓	原　潔君
金壹圓	橫井　正守君
新家先生分	
金壹圓五拾錢	中田　穰君
金壹圓	星加　正雄君
金貳圓	田近善右衛門君
金壹圓	橫井　正守君

謝恩金申込報告

新家先生分

金貳圓　川口勇二郎君

種子販賣

謹啓時下寒冷の候益々御清適の段奉賀候陳者小生曩に家事上の都合に依り帝室林野管理局を辭職し爾來老父が永年營業罷在候處の山林種苗販賣業に從事仕り候、就ては微力ながら專ら堅實を旨とし營業可仕候間何卒諸賢の熱誠なる御同情と御援助を賜はり度伏而奉懇願候

種子昨秋は凶熟にて折角の御高需に應する不能向も有之遺憾に被存候ひしも本年は當地方稀有の豐熟にして從而品質良好に候處良種多量に採收貯藏致し有候間左記種子多少に不拘御用仰せ付け被下度奉願候

長野縣西筑摩郡駒ヶ根村

蜂須賀兄弟商會

蜂須賀忠四郎

卒業生　蜂須賀宮治郎

○木曾產種子

扁柏、杉、落葉松、合歡木、花柏、樅、金松、ニセアカシヤ、鬼胡桃、澤胡桃、黃蘗、羅漢柏、七葉樹、櫨子、五葉松

其他各種子並に苗木

定價表御一報次第進呈可仕候尙御地方の種苗需用者御示敎被下候ハヽ幸甚の至候

大正七年十二月廿三日印刷
大正七年十二月廿五日發行

編輯兼發行人　長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地　安井正夫

印刷者　長野縣西筑摩郡福島町五七〇番地　川崎本雄

印刷所　長野縣西筑摩郡福島町五七〇番地　川崎印刷所

發行所　長野縣西筑摩郡福島町二八九番地　蘆澤書店

（定價金參錢）